宮崎県立看護大学研究紀要４（１）：８～19，2004

短　報

育児支援ボランティアを組織し活動した看護学生の成長過程

小野美奈子、松本憲子、川原瑞代、高藤ユキ、中村千穂子、瀬口チホ

【抄　録】

本研究は，育児支援ボランティアを組織し，活動を継続している看護学生の成長過程を明らかにすることを目的としている。

研究対象はボランティアの組織化及び活動経過における１４名の学生の認識と表現である。研究方法は，まず学生がボランティアを組織化し，活動を継続する上で，意味があると思われる場面を素材化し，学生の認識と表現の連関をたどりながら，場面の意味を取り出した。そして，場面ごとの意味を押さえつつ，学生の認識と表現の特徴を取り出し，看護学生の成長過程を明らかにした。

その結果，学生は，組織化の過程で，保健師の立場で対象のニーズを見出し，ニーズを満たすための社会資源の開発を自らおこなうことができた。そして，ボランティア活動を行っていく過程では，対象を捉える視点が母子から家族へと拡がり，問題解決方法も直接援助からセルフケア能力を高める援助へと発展していた。さらには，「家族」の形成過程を支えるという視点から，ボランティアという社会資源のあり方を自己評価し，効果的な育児支援のための社会資源へと変化させていた。つまり，経過とともに，家族自身で健康的に生活を整えることができるような支援へと，学生の関わりが発展している，という成長過程をたどっていることが明らかになった。

【キーワーズ】　看護学生，ボランティア活動，成長過程，育児支援，教育評価

Ⅰ　はじめに

本学は，地域の健康ネットワークを活用しながら，地域の人々が，自分自身でより健康的な生活が送れることを援助できる看護職者の育成を目指している。また，体験を通して学んだ知識・技術を修得できることを目指し，実習を重視した教育課程を編成している（図１）。

そのため定期の実習以外にも学生の体験の拡がりを期待して，ボランティア活動やフィールド活動を積極的に推進，支援している。その一つとして学生たちが組織し，活動を継続している育児支援ボランティア活動がある。

筆者らは，このボランティアグループに相談役として関わってきたが，活動を通して学生が成長して

Minako Ono, Noriko Matsumoto, Mizuyo Kawahara, Yuki Takafuji,
Chihoko Nakamura, Chiho Seguchi：宮崎県立看護大学

人間生活と看護
地域健康ネットワーク

地域の健康ネットワークを活用しながら、地域の人々が、自分自身でより健康的な生活が送れるように援助できる看護職者の育成が目標です。

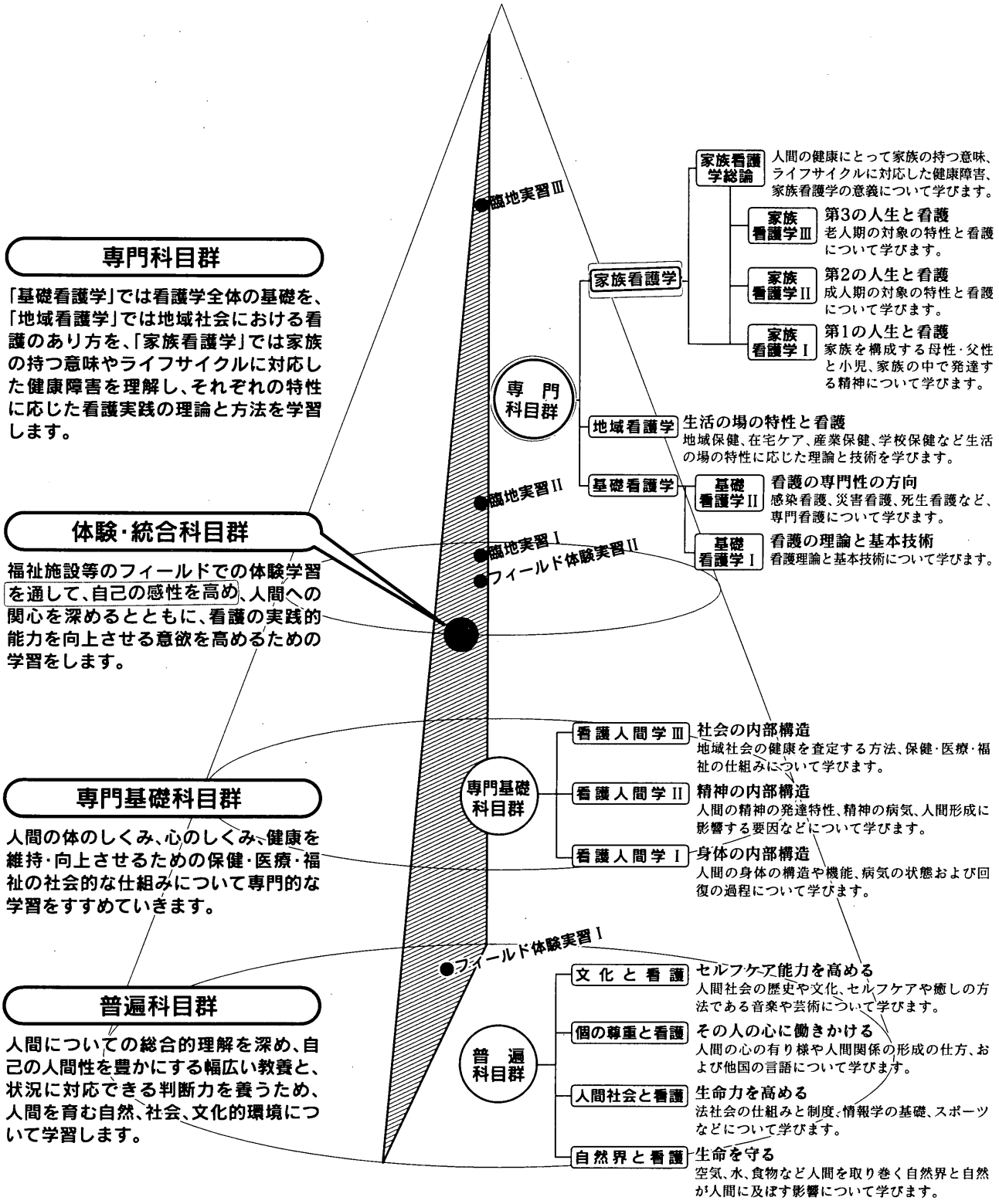

図1　教育課程の概念図

きていることを実感してきた。そこで，学生がどのような成長過程をたどっているのかを明らかにしたいと考えた。

先行研究を見てみると，ボランティア活動における看護学生の成長について研究したものには，森前らの研究があった。看護学生のボランティアの経験を調査し，ボランティアをおこなおうと思った動機やボランティアによって得られた学びについてまとめたものであった[1]。横川らは学生の活動後のレポートを分析し，地域でのボランティア活動における学生の学びについて報告していた。ボランティアに対して否定的イメージを持っていた学生も，活動後は「学びになった」「楽しかった」と肯定的イメージへと変化し，ボランティア活動は，学生の社会経験の少なさを補い，対人援助を目指す看護学生にとって有効であると結論付けていた[2]。稲垣らはボランティア活動が看護学生の成長過程に及ぼす影響について学生への卒業時のアンケート調査をもとに分析していた。看護職者としての人間的成長や看護観の発展に役立ったと答えた学生が多かったことを報告していたが，学生の自発性や積極性を引き出していくことへの課題を提起していた[3]。これらはいずれも既存のボランティアグループに参加した学生に対して，学びの内容を活動終了後に調査した研究であった。

文献検討の結果，看護学生のボランティア活動について研究したものは少なく，学生が組織化した活動を扱った研究はないことがわかった。本学においては学生の成長を学生の認識と表現に着目して明らかにする試み[4][5][6]をおこなっている。学生のボランティア活動における成長過程を，この方法を用いて明らかにした研究はみあたらず，本学の教育評価の視点からも意義があると確認できたので，本研究に取り組んだ。

Ⅱ　研究目的

1．研究目的

育児支援ボランティア（以下ボランティアとする）を組織し，活動を継続している看護学生の成長過程を明らかにする。

2．用語の概念規定

学生が成長するとは：学生が，看護の必要性を見抜くことのできる認識（看護観）とその構造を発展させることのできる表現（看護技術）を駆使し，自立して対象に看護を展開できるようになること[7]

Ⅲ　研究方法

1．研究対象

1）研究対象

１４名の学生のボランティアの組織化及び活動経過における認識と表現。

2）研究対象としたボランティア活動の時期

組織化から活動開始後９ヶ月間（平成14月10月まで）

2．分析方法

1）学生の活動記録と筆者らの記録をもとに，ボランティアを組織化するまで及び活動経過の詳細を思い起こし，事実関係を確認しつつ時系列に記述する。

2）1）をもとに，学生がボランティアを組織化し，活動を継続する上で，意味があると思われる，性質の異なるひとまとまりの場面を選択し，場面が第三者にも一義的に描けるように素材化する。

3）学生の認識と表現の連関をたどりながら，場面の意味を取り出す。

4）場面ごとの意味を押さえつつ，学生の認識と表現の共通性を検討し，学生の認識と表現の特徴を取り出す。

5）4）をもとに，ボランティアを組織し，活動を継続している看護学生の成長過程を明らかにする。

3．倫理的配慮

学生には，研究目的を伝え，記録の使用及び研究

結果の公表について口頭で同意を得た。ボランティアの対象となった事例には，研究目的，個人情報は研究目的以外には活用しないこと，研究結果の公表にあたってはプライバシーに配慮すること等を明記した文書をもとに口頭で説明し，書面で研究への同意を得た。

Ⅳ　学生が育児支援ボランティアとして関わった事例の概要と経緯

父親３９歳（公務員），母親３４歳（教員をしていたが育児休暇後退職予定），長男，次男，長女の三つ子の５人家族。児らが低出生体重児であったため，出産後，母子はA町の母方の祖父母宅で生活していた。児らが生後４ヶ月でM市の自宅に戻ってきた。

自宅に戻って１ヶ月目（児らが生後５ヶ月，修正月齢では３ヶ月）に，臨地実習Ⅱ（地域）での訪問実習をきっかけに学生が育児支援のためのボランティアを組織し，初回訪問の５日後から事例へのボランティア活動を開始した。現在，この活動は後輩に引き継がれ，２年目を迎えている。研究対象となった時期には，学生１４名でローテーションしながら，９ヶ月間，毎日，育児支援をおこなった。

Ⅴ　結　果

分析結果を表1に示した。学生のボランティア活動において，意味のある性質の異なる場面として，組織化の時期には８場面，活動の時期には６場面が選択できた。

活動の時期の前期にあたる，場面⑨と場面⑩を例にとり，分析過程を述べる。

１．場面の意味の分析

⑨初回から１ヶ月間のボランティア活動の場面については，次のように素材化できた。

『実習で訪問した３年生の学生Tを含め，３人で初回のボランティアにでかけた。実習の合間で一日授業がないので昼１３時に訪問。母親は，「こんなに早く，対応してもらえるなんて・・・。ほんとにうれしい」と言った。3時間ほど滞在し，児らの抱っことミルクを飲ませる手伝いをした。この日以降１週間は実習のない週であり，毎日午前，午後２名ずつボランティアが入った。実習が始まってからは，３年生は土曜日・日曜日に，２年生は平日の授業終了後にボランティアに入った。学生は，＜昼間は，児らは３人ともよく寝る。でも，夜は，眠らず泣く。母親は，３時間しか眠れない。母親の育児負担を少しでも軽くして，休息をとってもらいたい。＞と思い，２～３人で抱っこ，オムツ換え，ミルクづくりなどをした。母親からは，「来てもらえるだけでありがたい。気持ちにゆとりができる」という反応があった。』

この場面の意味を，学生の認識と表現の連関をたどりながら，次のように取り出した。

学生は，児らの睡眠と母親の育児負担の大きさに着目し，授業のない時間を使って，複数のボランティアで毎日育児を代行することにより，母親の心身の育児負担を軽減する援助を提供した場面。

また，⑩母親の育児負担が増強した時のボランティア活動の場面は，次のように素材化できた。

『学生たちは，＜児らが６ヶ月になり，物を何でも口に入れたがる。寝返りができ，動き回るようになる。H君，M君が初めて風邪もひいた。児らの看病により，母親も風邪をひいた。妊娠後，初めて月経がくるなど，疲れが一挙に表れているようだ。＞と思った。母親は「子どもが早く寝てくれなくて，ついイライラすることがある。最近虐待する親の気持ちがわかる」と言っている。母親が，子供を虐待しないだろうかと思いながら，聞き役になった。＜保健所保健師へ報告し，家庭訪問してもらったほうが良いのではないか＞と考え，教員へ相談した。教員は児らと母親の状況を保健所保健師へ連絡し，それを受けて保健所保健師は，家庭訪問を実施した。保健所保健師は母親の悩みを聞くと共に，母親の希

望を受けて多胎児サークルへの送迎支援をおこない，母親が孤立しないような援助をおこなった。学生たちは，＜実習で十分ボランティアに入れない，母親には育児不安を受け止めてくれる人が必要＞と考え，「育児経験の豊かな人（学生の母親）をボランティアの体制に加えたらどうかと考えている」と教員に相談した。教員は，「それはよい。ぜひ進めて」と支持し，学生の母親が週３日程度，日中ボランティアに入るようになった。母親から「大変助かった。」「育児経験者からのアドバイスや励ましによって，自分の子育ては間違っていなかったと安心することができた」と言われた。』

この場面の意味を，学生の認識と表現の連関をたどりながら，次のように取り出した。

学生は，児らの発達段階・疾病と母親の心身の疲労・負担に着目し，学生ボランティアの限界を感じ取り，相談役である教員を介して母親のニーズを満たす保健師と連携をとったり，育児経験豊かな新たな人的資源をボランティアに加え育児支援をおこなうことにより，母親が自信をもって育児に取り組めるようになった場面。

２．学生の認識と表現の特徴の分析

さらに，この２場面の意味を押さえつつ学生の認識と表現の共通性を検討したところ，以下のような，学生の認識と表現の特徴が抽出できた。

母親の育児負担に着目し，複数のボランティアで時間を調整しながらボランティアの量を確保し，専門家や育児の経験者の助けを求めて育児支援の質を確保し，母親が心身ともに安定して育児に取り組めるように直接的ケアを提供している。

その他の場面も同様の過程を経て分析した。

３．学生の成長過程

各場面，以上のような分析を経て，学生の認識と表現の特徴の変化をたどってみると，組織化の時期から活動の時期にかけて次のような学生の成長過程があることがわかった。

組織化の時期には，実習で受け持った事例の今後の援助の方向性を，ボランティアによる育児支援と，保健師の立場で見極めた学生が，母親のニーズを確認した上で，ボランティアの量や活動の継続性が確保できるように，仲間と活動目標を共有し，ボランティアの組織化をおこなっている。

活動の前期には，学生は，母親の育児負担に着目し，複数のボランティアで時間を調整しながらボランティアの量を確保し，専門家や育児の経験者の助けを求めて育児支援の質を確保し，母親が心身ともに安定して育児に取り組めるように直接的ケアを提供している。

活動の中期には，学生は，家族の生活全体，保健行動に着目し，問題への対処行動を高めるための知識を提供したり，育児負担軽減の方法を提案し，役割を分担することで，家族のセルフケア能力の向上を促す援助をおこなっている。

活動の後期には，学生は，家族員の生活の変化に着目し，家族員の個別性をふまえた援助をおこなうと共に，家族全体を捉え，家族としての健康が保たれるよう自らの活動を評価し，家族の機能が最大限発揮できる方向性で活動調整をおこなっている。

これらのことから，学生は組織化の過程で，保健師の立場で対象のニーズを見出し，ニーズを満たすための社会資源の開発を自らおこなうことができた。そして，ボランティア活動をおこなっていく過程では，対象を捉える視点が母子から家族へと拡がり，問題解決方法も直接援助からセルフケア能力を高める援助へと発展していた。さらには，「家族」の形成過程を支えるという視点から，ボランティアという社会資源のあり方を自己評価し，効果的な育児支援のための社会資源へと変化させていた。

つまり，経過とともに，家族自身で健康的に生活を整えることができるような支援へと，学生の関わりが発展している，という成長過程をたどっていることが明らかになった。

表1　ボランティア活動の組織化・活動の経過における学生の認識と表現の特徴

時期	月日 (児の月齢)	場面	場面の意味	学生の認識と表現の特徴
組織化の時期	H13.11.29 (3ヶ月)	①里帰り中の母親と三つ子と学生の初回の出会い(3クール目訪問実習の場面)	臨地実習Ⅱ(地域)の訪問実習において、里帰り中の母親と三つ子が、看護大学の教員と学生から育児援助と指導を受け不安が軽減したことにより、教員と学生による育児支援の効果について母親が実感した場面	実習で受け持った事例の今後の援助の方向性をボランティアによる育児支援と、保健師の立場で見極めた学生が、母親のニーズを確認した上で、ボランティアの量や活動の継続性が確保できるように、仲間と活動目標を共有し、ボランティアの組織化をおこなっている。
	H14.1.22 (5ヶ月)	②M保健所保健師と教員との母子訪問実習対象者選定の話し合い	現場の保健師と教員で、対象のニーズを満たし学習効果の上がる臨地実習Ⅱ(地域)の訪問実習事例の選定をおこなう過程で、教員が、訪問事例である母親と三つ子に、学生による育児支援ボランティアのニーズがあることを把握した場面	
	H14.1.24 (5ヶ月)	③自宅に戻った家族との出会い(4クール目訪問実習の場面)	里帰りから自宅に戻った母親と三つ子への訪問実習において、学生が、家族で健やかに過ごせることを目標に援助計画にそって援助をおこないつつ、両親から表出された育児支援のニーズと、看護者の立場で観察した生活状況を重ね、ボランティアによる育児支援の必要性と看護大学生によるボランティア結成の必要性を判断した場面	
		④訪問後の昼休み、ボランティアを結成したことを教員に報告した場面	リーダーとなる学生自ら、ボランティアの数の確保と活動継続の可能性を、学生集団の特性を踏まえ予測した上で、三つ子をもつ家族のニーズと学生が提供できる援助内容のつきあわせをおこない、学生による育児支援ボランティアの組織化が可能と判断し、教員に伝えたことにより、教員もボランティアを支援する意向を学生に伝えた場面	
		⑤学生がボランティアを行なう意志のあることを教員が保健所保健師に報告した場面	現場の保健師が、学生による育児支援ボランティアの組織化を地域の資源として認め、効果を期待する意向を示すとともに、教員が学生と家族と現場の保健師の調整役を担うことを認めた場面	
		⑥ボランティア活動に向けて学生と教員の相談の場面	リーダーとなる学生が、教員の支持を受けて、ボランティアの数の確保の行動を起こすとともに、教員の助言を受けてボランティア活動の内容と限界について家族と申し合わせることの必要性について理解した場面	
	H14.1.25 (5ヶ月)	⑦学生が母親との打ち合わせの結果を教員に報告した場面	母親のニーズとボランティア活動の内容が一致することを確認できたリーダーとなる学生は、日程や時間のボランティア間の調整や連絡ノートの設置について、教員の助言や支持を受けながら決定し、組織的にボランティアが活動できるような準備をおこなった場面	
	H14.1.28 (5ヶ月)	⑧2年生への協力依頼とボランティアの活動目標の説明の場面	リーダーとなる学生が、ボランティア活動の継続性を保つため、後輩への協力依頼をおこない、後輩の協力者を含めて14名のボランティアを確保し、仲間と活動目標を共有した場面	

活動の時期	活動前期	H14.1.29 以降 （5ヶ月）	⑨初回から1ヶ月間のボランティア活動の場面	学生は、児らの睡眠と母親の育児負担の大きさに着目し、授業のない時間を使って、複数のボランティアで毎日育児を代行することにより、母親の心身の育児負担を軽減する援助を提供した場面	母親の育児負担に着目し、複数のボランティアで時間を調整しながらボランティアの量を確保し、専門家や育児の経験者の助けを求めて育児支援の質を確保し、母親が心身ともに安定して育児に取り組めるように直接的ケアを提供している。
		H14.2月 上旬 （6ヶ月）	⑩母親の育児負担が増強した時のボランティア活動の場面	学生は、児らの発達段階・疾病と母親の心身の疲労・負担に着目し、学生ボランティアの限界を感じ取り、相談役である教員を介して母親のニーズを満たす保健師と連携をとったり、育児経験豊かな新たな人的資源をボランティアに加え育児支援をおこなうことにより、母親が自信をもって育児に取り組めるようになった場面	
	活動中期	H14.3月 （7ヶ月）	⑪児らが病気の時のボランティア活動の場面	学生は、児らの疾病時の母親ニーズを満たすために、リーダーが中心となり、学生の活動可能時間を調整しボランティアの量を増やす対応をするとともに、母親が児らの病気への対処行動が取れるように、教員からの助言を得て保健指導をおこなったり、母親が知識を得る資料を作成し提供することにより、母親の育児力が向上した場面	家族の生活全体、保健行動に着目し、問題への対処行動を高めるための知識を提供したり、育児負担軽減の方法を提案し、役割を分担することで、家族のセルフケア能力の向上を促す援助をおこなっている。
		H14.4月 （8ヶ月）	⑫父母の一方に大きな育児負担がかかったときのボランティア活動の場面	学生は、家族員が共同生活をおこなうことによって生じる制限やストレスに着目し、児らの入浴介助の一部を分担することで母親の心身の負担感を軽減したり、外出への援助を行い父親の心身の負担を軽減することにより、家族員すべてを調和的に整えることができた場面	
	活動後期	H14.5月 （9ヶ月）	⑬母親個人への援助の必要性を感じておこなったボランティア活動の場面	学生は、母親の出産前後の生活の変化に着目し、母親の生活過程に中に、自分らしさを取り戻すことができる楽しみを見つけ、育児や家事を分担し、楽しみを実践できるための環境を与えたことにより、母親の気分転換が可能となり、育児負担を軽減できた場面	家族員の生活の変化に着目し、家族員の個別性をふまえた援助をおこなうと共に、家族全体を捉え、家族としての健康が保たれるよう自らの活動を評価し、家族の機能が最大限発揮できる方向性で活動調整をおこなっている。
		H14.8月 （11ヶ月）	⑭ボランティアの活動の方向性を見直した場面	学生は、長時間の育児支援が家族の成長を阻害しているのではないかとの疑問を解決するために、教員を介して現場の保健師と話し合いを持ち、助言をもとに、自分たちの活動を、家族の発達段階と機能をふまえて自己評価し、ボランティアの日程・時間調整をおこない、家族のみで過ごす時間を増やしたことにより、家族のセルフケア能力を高めることができた場面	

Ⅵ 考 察

学生の育児支援ボランティアの組織化・活動経過における学生の認識と表現の特徴をもとに分析したところ，学生が成長していることが確認できた。また，援助の対象となった家族は，子供の成長・発達が促進され，家族のセルフケア能力も高まり，学生は質の高い援助を提供していたことも確認できた。

ここでは，学生の活動を，1．ボランティアの組織化・活動継続に影響を与えた要因の視点から，2．看護学生による育児支援ボランティアの意義の視点から，以下に考察する。

1．ボランティアの組織化・活動継続に影響を与えた要因

本学の地域看護学では，地域の看護職の独自な活動方法として組織活動を位置づけ教育している。まず，1年次の講義やフィールド体験実習Ⅱの振り返り学習において，住民から聞き取った健康問題を解決する手段として，看護職者が24時間傍にいない状況の中でどのようなことが可能かを考える学習をおこなう。その中で，健康な地域づくりに責任を持つ保健師には，新たな社会資源を創造し，住民同士の支え合いの中で問題解決を図るためのグループや組織を作っていく役割があることを，体験実習での具体的な事実を通して学ぶ[8]。2年次には，地域看護方法の授業において，組織化の方法論を学ぶ。住民のニーズを顕在化し，ニーズから出発すること，活動メンバーで目標を共有し，構成員個々人が活動の主体であるという自覚が持てるよう支援すること等が，組織化のために必要なポイントであることを学習する。さらに，臨地実習Ⅱ（地域）においては，実際にグループ・組織活動に参加し，住民の反応を直接感じることで，その効果を実感するとともに，自分の参加したグループや組織を育成してきた保健師の支援経過を，帰納的に振り返りレポートすることにより，組織活動の方法論を修得できることを目指している[9]。これらの学びをふまえ，今回，学生は，地域で，三つ子をもつ家族を支えるためには，新しい社会資源の創造が必要であることに気づくことができた。そして，対象家族のニーズを確認したり，メンバーに説明会を開いてボランティア活動の目的を共有するなど，講義や実習で学んだプロセスを踏みつつ，ボランティアの組織化を自らおこなうことができた。このことから，授業での学びをボランティアの組織化に生かすことができたと評価できる。

また，学生は，対象家族への援助に関して＜母親に少しでも育児負担を取ってもらいたい＞＜母親は出産前には入浴や食事作りを楽しんでいた＞など育児にあたる母親の立場や，＜母親が外出，父親一人での育児は大変。児らも最近外出していない。花見に誘おう＞など父親や児らの立場，つまり，家族員それぞれの位置に立場の変換をしながら思いを感じ取り，それをもとに，自分たちが今どのようなサポートをおこなえばよいかと考えることができていた。ボランティア活動が活性化するためには，参加者の強い動機づけや問題意識が必要であるといわれる[10]。本学においては，対象に人間的関心を注ぎ，相手の位置で思いを感じ取る立場の変換能力，すなわち，ナイチンゲールのいう「相手の感情のただ中へ自己を投入する能力」[11] の育成を教育目標の一つに位置づけている。この教育課程で育まれた立場の変換能力を使って対象家族の思いを感じ取れたことが，学生たちのボランティアの組織化・活動継続の原動力となったと考えられる。

さらに，学生はボランティアの経過中，家族員個々に着目するのみでなく，＜父親が育児参加できるように＞と家族の発達課題や機能に着目し，家族を一つのまとまりとして捉え，援助を展開することもできていた。鈴木らは，「家族成員という個の看護をおこないながらも家族内の関係性や単位としての家族を常に意識して看護がおこなわれることが，家族看護の本質である」[12] と述べている。このことから，学生は，ボランティア活動において，『家族看

護』を実践できたと評価できる。本学では看護の対象を「特定地域の特定の家族の中に生まれ，個別な存在として社会的に登録されて成長していく人間である」[13]と捉え，家族への援助が展開できる看護職者の育成を教育目標にしている。これまでの講義や実習を通して，家族を対象として関わることが必要であるとの看護観が学生の認識に形成されてきたと考えられる。

次に，フィールドとの関係性の点から考えてみたい。本学の地域看護学実習は，現場の看護職者との連携を重視している。現場の看護職者と教員が看護目標と実習目標を共有した上で，学生の関わりが地域住民の健康向上につながることを目指しフィールドでの学習を展開している[14]。その中で教員も一看護職者として現場の看護職者と共に住民への看護を展開しながら実習指導や実習調整に当たる機会も多い。今回の学生と対象家族との出会いは，臨地実習Ⅱ（地域）において，学生の訪問実習の対象者として，育児支援のニーズの高い事例を，現場の保健師と教員が相談の上選択したことから始まっていた。また，学生ボランティアによる育児支援を受けたいというニーズを，母親が表出した背景には，学生と教員による育児支援の効果を，実習を通して母親が実感していたことがあったこともわかった。つまり，ボランティアの組織化は，地域住民の健康を守る立場から学生という社会資源への期待をした現場の保健師と，学習効果を狙った教員とのきっかけづくりのもとに開始されたといえる。そして，学生のボランティア活動の経過中，教員が取った役割は，①ボランティア間での情報が共有できるための連絡ノートの設置の提案など，ボランティアを組織的に運営していくための工夫についての助言や，②「児らが水痘に罹患。風呂は入れても良いかと母親から聞かれたが」など学生が答えられない母子への保健指導についての学生への助言であった。また，③「夫婦の外出時学生だけで子供を見てといわれたが自信がない。依頼を受けるべきか」など活動展開上，学生が迷った時の判断基準についての確認や示唆をおこなう役割であった。一方，現場の保健師は，①学生からの要請に応じて母親の育児不安の増強時への援助など，ボランティアで担えない援助に対しての専門家の立場からの家族への支援，②家族のセルフケア能力を高める援助ができるように，学生ボランティアという社会資源の質を保つための調整，などの役割を担っていた。そして，ともになるべく学生の自主的な活動がおこなわれるように見守っていた。このことから，現場の保健師と教員には，看護目標と教育目標が共有されていたことが伺える。このように，現場の保健師と教員から，密な情報交換や連携にもとづく支援を学生が受けたことにより，効果的なボランティア活動が展開できたといえる。

以上より，学生が成長し，家族を整える援助が展開できた要因として，本学の教育課程や現場の保健師と教員との看護実践・教育における協働が影響していることが確認できた。

2．看護学生による育児支援ボランティアの意義

今回学生が育児支援をおこなった事例は，多胎児であった。多胎児は，母親の育児の負担や子供の発達上の問題等により，ハイリスクグループと位置づけられていながら母子保健対策が不足していることが従来より指摘されてきた[15]。また，多胎児を育てることによる母親の重度の睡眠不足と疲労の蓄積が児童虐待の引き金になりやすく，それを予防するために，育児の援助者の存在が必要であるといわれている[16][17]。矢野らはふたごの母親のサポートシステムに関する研究において，多胎児が生後4ヶ月頃までは複数の援助者で育児の支援をしていくことの必要性を強調しているが，育児期の主な援助者は夫，実母などインフォーマルなサービスが中心となっている状況を危惧している[18]。服部は，多胎児育児支援として，保育サポーターなど気軽に利用できる育児サポートサービスの普及が必要であると述べている[19]。核家族化が進行してきた現代において，

フォーマルサービスとしての学生による育児支援ボランティアが地域の中に存在することの意義は大きいと考える。今回，学生は，看護学生であるという特性を最大限に活かした援助をおこなっていた。

まず，育児疲労が増強するといわれている児らが5～6ヶ月（修正月齢3～4ヶ月）には，夕方や休日も複数のボランティアで同時に関わり，抱っこ，オムツ換え，ミルクの準備など，育児を分担していた。その後も，児らが病気の時，外出時など，必要な時に必要な人数のボランティアによる援助を提供していた。それにより，母親の育児負担が軽減されていた。このような柔軟な対応が可能となったのは，ボランティアの量が確保できたこと，学年の違うボランティアが確保でき，活動時間の調整が可能であったことなど，学生であるという利点が活かされたことによると考えられる。

また，学生は，児らの疾病や母親の体調の変化に対する知識の提供をおこなったり，教員や現場の保健師と連携をとることで母親の育児や健康上の疑問を解消し，セルフケアが高まるようなサポートをおこなっていた。多胎児の育児は成長過程で疾病や発達上の不安，母親のストレスなどの問題も起こりやすいといわれている[20]。専門知識・技術を提供し母親の不安の解消や児らの健康の維持増進に寄与できる援助がおこなえたことも看護学生ならではの活動であったといえる。

さらに，組織的にボランティアの活動が展開されるためには，コーディネーターの存在が不可欠である[21]。今回は，この役割をボランティアグループのリーダーが取り，新たなメンバーの追加，ボランティアの回数の変更，現場の保健師との話し合いの開催，関わり方の変更など調整をおこなうことができた。これは，身近に，組織活動の方法を熟知した，保健師である教員という相談役及び現場の保健師との橋渡しを担う存在を得たことにより，学生が自ら調整力を働かせることができ，主体的に，そしてタイムリーに活動を展開できたと考えられる。それにより，組織的な活動の質が向上し，育児支援ボランティアが家族に役立つ社会資源として成長し，機能することができたと考える。

以上より，看護学生という人材で組織された育児支援ボランティアは，地域の育児力の向上のために有効な社会資源となりえたといえる。

Ⅶ　おわりに

本研究は，ボランティア活動開始段階の限られた学生の活動をもとに分析したものであるため一般化するには限界がある。しかし，自主的に組織化したボランティア活動における学生の成長過程を，学生の認識と表現の特徴をもとに確認できたことは意義があると考える。また，大学の地域貢献のあり方を考える上でも示唆を得ることができた。今後，児らの成長や家族の変化，また，地域の育児支援ボランティアへの期待の高まりによって，学生の活動が変化してくることも考えられる。これからも教員として，学生の活動を支援していくとともに，継続して学生のボランティア活動やフィールド活動における成長過程を研究していきたい。

謝　辞

学生を育てて頂き，本研究にも快く承諾してくださいました対象家族の皆様に心より感謝いたします。また，ボランティアとして活動している学生たちの行動力と協力に感謝いたします。

本稿は日本看護教育学会第13回学術集会で発表，加筆・修正したものである。

引用文献

1) 森前光子，広瀬五十子，細田晶子，古田桂子，正者美穂，篠崎真里，尾崎圭，冨田栄一：岐阜市立看護専門学校学生のボランティア活動に関する一考察，岐阜市民病院年報，19，87-91，1999.
2) 横川裕美子，稲垣絹代，岡本裕子：地域でのボランティア活動における看護・福祉系大学生の学び－活動レポートの分析から－，日本看護学教育学会第11回学術集会講演集，211，2001.
3) 稲垣絹代，横川裕美子：ボランティア活動が看護学生の成長過程に及ぼす影響－卒業時の質問紙調査より－，日本看護学教育学会第12回学術集会講演集，281，2002.
4) 薄井坦子，三瓶真貴子，山岸仁美，栗原保子，小野美奈子，赤星誠，阿部恵子，寺島久美，リウ真田知子，島川直子，稲田夏希，嘉手刈英子，山本利江，新田なつ子，中野栄子：宮崎県立看護大学における教育課程の構築とその評価，宮崎県立看護大学研究紀要，3（1），1-9，2002.
5) 栗原保子，小野美奈子，稲田夏希：学生の看護観の発展過程に関する研究－4年次臨地実習報告書の質的分析をとおして－，宮崎県立看護大学研究紀要，3（1），18-25，2002.
6) 小野美奈子，栗原保子：臨地実習Ⅱ（地域）における学生の看護観に関する研究－学生の看護観と教授-学習過程の連関に焦点をあてて－，宮崎県立看護大学研究紀要，3（1），27-39，2002.
7) 前掲書 4)：5
8) 小野美奈子：“地域で生活する家族と関われる看護職者の育成-フィールド体験実習の評価，綜合看護，33（4），29-36，1998.
9) 宮崎県立看護大学地域看護学実習連絡会資料：グループ・組織化活動における保健師の役割についての学び，平成13年度
10) 岩波書店編集部編：ボランティアへの招待，岩波書店，2001.
11) Florence Nightingale，湯槙ます，薄井坦子，小玉香津子，田村真，小南吉彦訳：看護覚え書，第6版，227，現代社，2000.
12) 鈴木和子，渡辺裕子：家族看護学　第2版，16，看護協会出版会，1999.
13) 前掲書 4)：5
14) 小野美奈子，川原瑞代，中村千穂子，松本憲子，高藤ユキ，瀬口チホ，名原壽子：地域看護学の独自性と評価－1－実習における学生の看護観の発展に焦点をあてて－，84-90，宮崎県立看護大学自己点検・評価報告書，平成15年3月
15) 横山美江：多胎児家庭のかかえる問題と育児支援－その現状と地域母子保健の課題，へるす出版，生活教育46（3），7，2002.
16) 早川和夫：双子の母子保健マニュアル，214-218，医学書院，1993.
17) 小泉武宣：子ども虐待予防の視点からの多胎児育児支援，へるす出版，生活教育，46（3），50-56，2002.
18) 矢野恵子，坂上明子，深川ゆかり，服部律子：ふたごの母親の妊娠中から3歳頃までのサポートシステムに関する研究，母性衛生，39（1），120-128，1998.
19) 服部律子：多胎児育児の課題と求められる行政支援－多胎児サークルのサポート実践から，へるす出版，生活教育，46（3），23-27，2002.
20) 前掲書 16)：121
21) 筒井のり子：保健師に期待されるボランティアコーディネーターとしての役割，生活教育，46（8），49-54，2002.

Nursing student's developmental process: Organizing child-rearing support volunteers and continuing volunteer activities

Minako Ono, Noriko Matsumoto, Mizuyo Kawahara, Yuki Takafuji,
Chihoko Nakamura, Chiho Seguchi

【Abstract】

The purpose of this research was to clarify nursing student's developmental process in organized volunteers for the support of child-rearing and continuing volunteer activities.

Recognition and expression of 14 students in organized and continued volunteer activities were analyzed. Characteristics of the student's recognition and expression, and nursing student's developmental process was clarified.

The results are as follows:

1 Nursing student's development in the process of organizing volunteers;
Students found out the mother's and child's needs in a public health nurse's position and organized the social resource for fulfilling these needs by themselves

2 Nursing student's development in the process of continuing volunteer activities;
1) Students changed from the assisting the mother and child to assistance for an entire family that makes up the volunteer activity.
2) Students developed an assistance method that heightened self-care capabilities due to direct assistance.
3) Students changed child-rearing support volunteer activities to a social resource that created a better cohesive family environment.

That is to say, due to the direct influential shift of developing a mother/newborn support system to family centered one, it is possible to see that families can now live a healthier and more progressive life.

【key words】 nursing student , volunteer activity, developmental process, child-rearing support, curriculum evaluation

Minako Ono, Noriko Matsumoto, Mizuyo Kawahara, Yuki Takafuji,
Chihoko Nakamura, Chiho Seguchi : Miyazaki Prefectural Nursing University